

2021年5月30日・佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書18章33～40節

説教題：イエスの国

随分前になりますが、「命のビザ」というドラマを見ました。杉原千畝という外交官を主人公にしたドラマです。杉原千畝氏は、1940年、リトアニアの日本領事館の領事代理だった時に、本国の命令を無視して、助けを求めて来たユダヤ人に大量の日本通過ビザを発行して約6000人のユダヤ人の命を救ったと言われます。ドラマの中に、こんなシーンがありました。逃げ場を失ったユダヤ人達が日本領事館の回りに押し掛けています。今にも中に入ろうかという勢いです。その時、彼はこう言います。「ここは日本領事館です。無断で領事館の敷地に入ることは、不法入国をすることになります」。リトアニアにあっても、日本領事館の敷地内は日本国、日本の飛び地のようなものだと思います。

今朝の聖書箇所は、ローマの総督ピラトによるイエス様への尋問の記事を扱いますが、対話の中でイエスが言われたのは「わたしの国はこの世のものではない」ということです。この「わたしの国(イエスの国)」が、今申し上げた外国にある大使館(領事館)のようなものだと思うのです。

さて、この時、ユダヤ人指導者達は、イエス様をピラトの許に連れて来て(「ルカ福音書」によると)「この人はわが国民を惑わし、カイザルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることがわかりました」(ルカ23:2)と訴えました。「王」という言葉を使って、「ローマ帝国に反逆する危険分子」として訴えて、裁いてもらおうとしたのです。

ピラトの仕事は、ユダヤ人に反ローマ的な暴動を起こさせずにユダヤを平穏に治めることでした。ここでも彼は、その観点からイエス様に相對します。彼は「お前がユダヤ人の王なのか」(33・新共同訳)、つまり「反ローマ的な民族運動、政治活動を行ったのか、行うのか」と聞きます。とにかく「イエスが何をしたのか」それが知りたかったのです。それによって、イエスをどう裁けば良いかがはっきりすると考えたのです。

それに対するイエス様の答えは、「わたしの国はこの世のものではありません」(36)というものでした。これは、ピラトの最初の質問「お前はユダヤ人の王なのか」に答えられたものです。「わたしは王であるけれど、わたしの王国は、ローマに反逆するような、そんな性質の王国ではない、わたしの王国は地上ではなく、天上に起源を持つものだ」ということです。

尋問はまだ続きますが、今朝は「わたしの国はこの世のものではありません」(36)という言葉—(「わたしの国」、それは「神の国」と言い換えても良いと思いますが)—について学びたいと思います。いつか、どこかで「国を構成する三要素は、『領土』と『法律』と『国民』だ」と聞きました。「領土、法律、国民」の順序で「わたしの国(神の国)」について学びます。

1：神の国はどこにあるのか(どのように建てられて行くのか)

普通、国を建てるという場合、どのようにして建てられるのでしょうか。毛沢東は「革命は銃口から生まれる」と言ったそうですが、武力をもって建てられるのがこの世的な考え方ではないのでしょうか。そしてピラトが恐れたのも、その意味での王であり、王国でした。しかしイエス様は武力とは無縁です。では、イエス様の言われた「わたしの国(神の国)」は、どこに、どのようにして建てられて行くのでしょうか。

かつてイエス様は、「神の国は、あなたがたのただ中にあるのです」(ルカ17:21)と言われました。「イエスの国(神の国)」は、まず私達の心の中に生まれるのです。私達の心はその領土なのです。では「神の国」は、どうやって私達の心の中に生まれるのでしょうか。「国」という言葉は「支配」という言葉と置き換えることが出来ると言われます。つまり私達の心が神の支配、イエ

ス様の支配に入る時、私達の心に「神の国」が建てられるのです。では、どうやって私達の心が神に支配されるようになるのでしょうか。

星野富弘という方は、事故で首から下が動かなくなり、絶望の中におられました。神を信じるようになる過程でイエス様の御言葉が彼を引きつけるのです。「全て、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」(マタイ 11:28)の言葉です。彼はこの言葉を自分のこととして受け取ったのです。「イエス・キリストというお方が、私を持ち上げて下さるように感じた」と言っています。神の言葉に、私達の心をつかむ力があるのです。インターネットである牧師が「マタイ 11:28」を読んで訴えておられました。

「イエス様が『わたしのところに来なさい』と言っておられます。辛い時、苦しい時は、神様を呼んで下さい。神様があなたのそばに来て、あなたの問題を解決して下さい。神様が助けて下さいます。私もそうやって問題を解決してもらいました。神様を呼んで下さい」。この御言葉だけではない、それぞれの信仰者が、それぞれの御言葉によって神の支配に入っていくのです。

地上の国は武力で生まれます。でも「神の国」は神の愛の言葉を通して、まず私達の心の中に生まれるのです。「詩篇 84 編」は歌います。「なんと幸いなことでしょう。その力が、あなたにあり、その心にシオンへの大路のある人は、彼らは涙の谷を過ぎるときも、そこを泉のわく所とします」(詩篇 84:5)。私達の心に「神の国」が生まれ、その心に「シオンへの大路(神の都、天国への思い)」が生まれる時、「涙の谷を過ぎるときに、そこが泉のわく所となる」のです。なぜなら、そこは、神の愛と力が現実には及ぶという意味で、天国の飛び地なのです。だから「涙の谷が、祝福の湧き上がる泉に変わる」と言う経験をさえるのです。

そしてイエスの言われた「神の国は、あなたがたのただ中にあるのです」(ルカ 17:21)の「あなた方のただ中に…」は「あなたがたの間に…」とも訳せる言葉です。私達がイエス様を中心として誰かと交わる時、1つ1つの「神の国」という点と点が結びれて線ができ、面ができ、そのようにして、「神の国」が広がっていくのです。それが教会の御国建設の大きな使命です。

2 : 神の国の法(性格)はどのようなものか

イエスが 36 節で「わたしの国(王国)」という言葉が使われたので、ピラトは「王国」という言葉が気になりました。なぜなら、彼はそれを地上的な意味で取ったからです。先程も言ったように、イエス様は神から遣わされた「王の王キリスト」という意味で王ですから、「あなたが言う通り」(37)と言われましたが、ピラトが誤解しないように、御自身について、さらに御自身の国についてその性格を語られます。イエスは「わたしは、真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に来たのです」(37)と言われました。「真理」という言葉は、分かったようで分からない言葉ですが、「新約聖書」に日本語の「真理」が 79 回使われています。例えば「コロサイ 1 章 5 節」に「福音の真理の言葉」(コロサイ 1:5)とある通り、それは「福音」と言い換えることが出来ると思います。では「福音」とは何でしょうか。「福音」とは、一言で言えば「罪の赦し」です。では「罪の赦し」とはどういうことでしょうか。「イザヤ書 59 章 2 節」に「あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いて下さらないようにしたのだ」(イザヤ 59:2)という言葉があります。私達の罪が私達と神の間に仕切りとなっているというのです。だから「罪の赦し」とは、私達がどんな者であっても、私と神とを仕切っていたその仕切を、神の方が取り去って下さり、私達が神に受け入れられるようになる、ということです。藤井圭子という方は尼僧からキリスト教の伝道者になった方ですが、こんなことを言っておられます。「神様に向かって…祈れる世界がここにある！…人間が、本当に神様と交われる世界がある！罪が赦された世界とは、人が神に祈ることを許された世界であり、神が祈りをお聞き下さる世界なのだ！」。この方も、長い間、

御主人の看病をしたり、また息子さんを亡くされたり、人間的には大きな悲しみ、苦しみを通られた方ですが、神に赦され、神と交われる世界を喜んでおられるのです。先日、教会に来られた方は「高校生の時から自分の罪が苦しくて、苦しくて仕方がなかった、それが赦され、神様の腕の中に飛び込めた時の喜びは大きかった」と言われました。「神の国」は、神の福音が現実によって来る国です。そして、神に触れられる国です。

しかし、罪の赦しが実現するため、神の子が十字架に掛からなければならなかったのです。イエスは 37 節で「このことのために世に来たのです」(37)とっておられますが、天地を造られた神の独り子が死ぬという、計り知れない犠牲の上に「信じる者は神に受け入れられる」という恵みがあるのです。

「神の国」は、この神の愛と犠牲によって成っているのです。だから「神の国」の法も「真理」と「愛」で特徴づけられるのです。イエスは言われました。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ』。これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです」(マタイ 22:37~39)。神を愛するから真理(神に対する真実)に生きるのです。そして愛の内に働く力を信じるから隣人を愛する愛に生きるのです。因みに CS ルイスは、キリスト教の愛についてこのように言っています。「(愛とは)自分については生まれつき自然にもっているが、他者に対しては努力して学ばなければならない意志の状態である…自分を愛するとは自分を好きになることを意味しない。自分を愛するとは自分のためを思うことである。同じように隣人に対するキリスト教的愛も好きになるとか愛着を感じるとかいうこととは全く別である…『私は隣人を愛しているだろうか』等と考えている暇があったら、さっさと出て行って愛しているかのように行動してみることである。行動するや否や、私達は大きな発見をする。それは、愛しているかのように振る舞っていると、やがてその人を本当に愛するようになる…今日、あなたの行った小さな愛は、数ヶ月後、考えもしなかったような勝利をあなたにもたらすことになるかも知れない」。神を愛し、隣人を愛す、そのようにして「神の国(イエスの国)」を生きる者でありたいと願います。

3 : 神の国の民とはどのような民か

37 節でイエスは「真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います」(37)とされました。それは「神の国に属する人は皆、イエス様の言葉に聞き従う、御言葉に生きる」ということです。「神の国」の民とは、神に死んでもらった人達です。神に命を犠牲にしてもらい、神の命を受けた人達です。教会で使う「贖う」という言葉は、「買い戻す」という意味です。誤解を恐れずに言えば、私達は、神様が命を犠牲にして悪魔の手から買い戻して下さった者達です。だから、もう滅びないのです。悪魔も私達を滅ぼすことは出来ないのです。

しかし、ということは、私達は神のためにも、人生を大切に生きなければならないと思います。それは、神が私達に願っておられる、その神の願いに答えるように歩むことではないでしょうか。そして、神の願いに答えるように歩むことは、私達が、私達の本国である天国に帰る準備、天国で豊かに暮らすための自分づくりでもあります。

しかし、そのためには「神の願い」を知らなければなりません。どうやって神の願いを知のでしょうか。それは御言葉によるのです。2つだけ取り上げると、例えばこういう御言葉があります。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあつて神があなたがたに望んでおられることです」(1 テサロニケ 5:16~18)。「主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか」(ミカ 6:8)。しかし御言葉は、ただ神の願い

を教えるだけではありません。CS ルイスは「人間は神を燃料にして生きるように造られている」と言いました。車はガソリンがなければ走らないように、私達も神の言葉が無ければ燃料切れになって信仰者としてよく走れないのです。

1人の方の話を紹介して終わります。この方は中学生の時に網膜剥離で失明をしてしまいました。あるクリスチャンとの出会いを通して「教会に行こう。この後、何のために生きるのか、教えてもらえるかも知れない」と考えて、教会に通い始めます。神様の話を聞きますが、「どうして私の目を見えなくさせたのですか」と、どうしても納得出来ないのです。それでも教会に通い続け、やがて洗礼を受けました。しかし、その後も「神様、どうして私の目は見えないのですか」と悲しみを神にぶつけていたのです。ある日のこと、泣きながら祈っていて、いつの間にか眠っていました。目が覚めた時、聖書の御言葉が心に響いて来ました。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる」(黙示録 21:3~4)。「川の両岸には、いのちの木があって、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした」(黙示録 22:2)。「すごい、天国に行ったら、見えるようになるんだ。あの木の葉を食べさせてもらおう…。やがて彼は牧師になって、学校に呼ばれるようになりました。ある時、子供達にこう話したのです。「この木の葉を食べたら見えるようになる。だから、今見えなくても、ま、いいかと思っているんです」。この言葉に、子供達が感動したそうです。

そのように、御言葉が神の民を導き、支え、生かして行くのです。だからイエス様は、「皆、私の声を聞く、聞き続ける」と言われたのです。神の民は、神の言葉によって生かされて行くのです。

最後に

初めに杉原千畝氏のことを御紹介しました。彼は、皆がユダヤ人を迫害する社会の中で、1人ユダヤ人を守るために生きました。世に在って、同じ時代に、同じ場所で生きながら、しかし実は、「神の国」を、神の法に従って、神の民として生きたのではないのでしょうか。彼もクリスチャンです。私達も世に在って、しかし「神の国」を、神の法に従って、神の民として生きることが出来るし、そう期待されていると思います。やがて私達が天の本国に帰って、主にお会いする時、「よくやった、天国の良い大使だった」と言って頂けるとしたら、何という喜びでしょうか。